
【フィールドワーク通信】

山形県南陽市における「鶴女房」の語り

廣田 里咲（早稲田大学文学研究科文化人類学コース）

はじめに

「鶴女房」とは、日本各地で採話されている民話である。たとえば『日本昔話大成』によれば、「鶴女房」に分類されている民話は青森県から鹿児島県に及ぶ広い地域で採話されており、72話が紹介されている〔関 1978：201-218〕。その中でも「鶴女房」に関する地域の語りや展示がある場所の一つが、山形県南陽市にある「夕鶴の里」であり、そこで語り部が語る「鶴女房」とは、以下のような内容である。

新山に住む金蔵という男が、宮内で商売をした帰りに、子供にいじめられている鶴を助ける。その晩、足を怪我した女性が訪ねてきたので、金蔵は薬箱を出してオトギリソウという薬草で手当てをし、家に泊める。翌朝、金蔵が起きると朝ご飯ができており、二人で食べる。女性は、怪我の手当てをしてくれたお礼に機を織るので、7日の間はその様子を見ないでくれと金蔵に言う。7日目の朝、金蔵はとうとう待っていられなくなって、覗いてしまった。中には鶴がいた。鶴は「私はあの時助けてもらった鶴だ。織っていたのは、仏様のお姿をした「おまんだら」というものである」と言って、去って行ってしまった。金蔵は、「鶴でさえ助けられた恩を返してくれるのに、自分は見るといふ約束を守れなかった。申し訳ないことをした」と、お寺を建てて、「おまんだら」を収めた。寺の名前は、最初は金蔵の名前から「金蔵寺」だったが、後に「鶴が織った布がある山、珍しいものが収めてある寺」という「鶴布山珍藏寺」へと変化したという¹⁾。

このような「鶴女房」が、南陽市内のどこで、どのように語られているのかについて、現時点で明らかになったことを以下にまとめる。南陽市内の訪問先としては、夕鶴の里までの道中、夕鶴の里資料館内部、夕鶴の里語り部の館、という3点に絞る。

1. 道中の「鶴女房」

東京から夕鶴の里資料館に行くには、まず新幹線で東京駅から赤湯駅まで行き、そこからフラワー長井線という路線に乗り換えて、最寄り駅である「おりはた駅」に行くという方法がある。赤湯駅に到着した時点で、すぐに「鶴女房」に関する情報を手に入れることができる。赤湯駅構内の観光案内所前には、「みちのくおとぎ街道²⁾」というパネルがあり、その近くには、「鶴女房」のストーリーを物語る絵と一目でわかるような、鶴と女性の姿が描かれたパネルもある。

赤湯駅前のロータリーに出ると、大きな南陽市の観光案内の看板がすぐ目に入り、そこには夕鶴の里資料館の情報が載っている。この看板では、夕鶴の里資料館も含めて、7つの場所が案内されている。熊野大社、烏帽子山公園、結城豊太郎記念館、南陽市文化会館、南陽スカイパーク、赤湯温泉、そして夕鶴の里資料館である。

おりはた駅でも「鶴女房」の絵を見ることができるが、ここでは赤湯駅で見られるような「鶴女房」の表象イメージとは異なり、具体的なストーリーの場面が描かれた絵を目にすることができる。おりはた駅には待合室があり、その壁に、地域の小学生たちが描いた6枚の絵が飾られている。それぞれ、金蔵が鶴を逃がす場面、娘が金蔵の家を訪ねてくる場面、娘が布を金蔵に渡す場面、金蔵が布を売りに行く場面、鶴が機を織っている場面、鶴が去っていく場面が描かれている。

2. 夕鶴の里

夕鶴の里には、資料館と語り部の館という2つの建物がある。また、「ゆうづる」という専属の民話会が存在する。

民話会「ゆうづる」は、2023年で30周年を迎える。夕鶴の里を造るにあたり、民話会の「ゆうづる」が立ち上げられた。そして、その2年後に資料館と語り部の館の2つの建物が出来上がったようだ。

2-1. 夕鶴の里 資料館

3階建ての資料館は、養蚕で使われていた「まゆ蔵」を改修して作られたものである。1階にはシアタールームと民家の復元展示、木下順二氏の戯曲「夕鶴」に関する展示がある。2階の展示スペースが一番広く、地域の製糸に関する展示が中心になっており、所々に民話の映像展示がある。3階は少し狭く、近代の製糸に関する展示と、けん玉やメンコなどのおもちゃの展示があった。

シアタールームでは「鶴女房」の20分ほどの映像を見ることができる。その映像とは人形劇の静止画を使ったもので、人形のポーズや人形を映す角度が異なる複数の静止画が次々と映し出される。音声は地の文の語りと登場人物の台詞の二つで成り立っており、登場人物の台詞は標準語が使われている。それに対して、地の文の語りは歌舞伎のようで、それは分かりやすく字幕でも表示されるが、登場人物の台詞には字幕はつかない。ここでの「鶴女房」は、物語のあらすじは上で紹介した語り部による「鶴女房」とほとんど変わらない。しかし、他の場面での「鶴女房」(例えば上で紹介した語り部による語りや、地域の図書館で読むことができるもの)と比べ、印象的に加えられている特徴的な場面が2つある。まず、主人公・金蔵と(鶴が化けた)女性が共に暮らし始めた後の生活の様子や、村の子供たちと楽しそうに遊ぶのどかな様子が映し出される場面である。次に、女性が村の人々から「どこの者かわからない」「どうやって村の子供たちを手なずけたのか」と警戒されている、疑いの目が向けられている様子が描写される場面である。また、女性(鶴)が機を織る動機は、「冬なのに食べ物がないでどうにもならない」からであり、金蔵が機織りの様子を見てしまう場面では「糸もないのに何を織るのか。自分まで気がおかしくなりそうだ」と心情が説明される。

資料館1階には、民家を一部復元した展示がある。民家の中には人が近づくと感知するセンサーが設置されているのか、展示の一部が動き出し、約1分の演出が始まる。まず音楽が流れ始め、機織り機が置かれている部屋の襖が閉まる。そして、機織り機の前に座る女性の影が浮かび上がり、機織りの音が聞こえてくる。しばらく後に照明が消え、始まりと同じ音楽とともに襖が開くと、誰もいない機織り機がそこにある。鶴が機織りをしている様子を覗く主人公の気分になれるような演出だと感じた。

復元展示の壁の説明パネルには、「鶴女房」と珍藏寺について書かれている。それによると、文化元年(1804)の「鶴城地名選」という、米沢藩の地理・城郭・神社仏閣・旧跡などの縁起や概略を記録した書物に、「鶴女房」が珍藏寺の開山縁起として記録されている。その記録にある物語のあらすじは以下のようなものである。

金蔵という人が、宮内の町で柴を売った帰り道、売られている鶴を買って助ける。その夜、一人の女性が金蔵を訪ねて来て、夫婦になってほしいという。金蔵は貧しさを理由に断るが、女性には考えがあるということで夫婦となる。女性は絹を織り、金蔵が宮内へ売りにゆくと高値で売れる。家に帰ると女性はいなくなっており、金蔵は思案の末出家して鶴の冥福を祈る。また、織物を買った人は、よく見ると布が鶴の毛でできており、金蔵が出家していることを聞いて、金蔵に織物を返した。そして、その織物は鶴の毛織として寺の宝物としてあり、寺の名前も金蔵からとっていたものが、いつの間にか珍藏になっていたという。

以上からわかるように、最初に記された「鶴女房」の物語の記述は、「宮内」などの地名は同じであり、金蔵が助けた鶴が織った織物が寺の宝物になっているという点も同じである。ただ、鶴は子供にいじめられているのではなく売られていること、鶴が織ったものは「おまんだら」ではなく売るための布であること、鶴の姿を見たのではなく布を売って家に帰るといなくなっていたことなど、語り部の語りとは異なる部分もある。

資料館の2階から3階は、昔話についての展示ではなく、地域の製糸産業・織布産業についての展示になる。こ

ここでは、珍藏寺との関わりでなく、地域の製糸・織布産業との関わりの中に「鶴女房」が位置付けられているのだと考えられる。「鶴女房」は布を織る話であるし、この地域の製糸産業が盛んであるというのは重要な要素なのだろう。2階は大まかにわけて3つのテーマに分かれていると言える。最初に製糸についての展示があり、次に機織りに関する展示、最後に養蚕信仰に関する展示となっている。3階には近代の製糸産業に関する展示がある。これらの展示の合間には、昔話の音声展示があり、ボタンを押すと昔話の語りが再生されるようになっていた。その語りは、標準語と方言の2種類が用意されていた。また、3階と2階を繋ぐ階段近くの壁には、全国の「鶴女房」分布地図があった。この地図によると、全国で240以上の「鶴女房」が採話されており、山形県の隣の新潟県が最も採話数が多く、42話が採話されている。



図1 資料館1階にある民家の復元展示
上で述べた演出が始まると、右側にある襖が閉まる。(著者撮影)



図2 資料館2階の展示（著者撮影）

2-2. 夕鶴の里 語り部の館

夕鶴の里では、語り部ホールという多角形の建物で語り部の話を直に聞くことができる。「民話会 ゆうづる」に所属している語り部が日替わりで語りを担当している。語り部ホールには語り部が座るための壇があり、壇の前には囲炉裏のセットがある³⁾。ホームページやパンフレットの語り部ホールの写真では、床に座布団が敷かれており、そこに聴き手が座れるようになっている。しかし、私が行った時には座布団の代わりにパイプ椅子が置かれていた。聴き手に高齢者が多くなったため、5年ほど前から座りやすいパイプ椅子に変更されたようだ。語り部ホールの収容人数は、座布団で200人ほど、パイプ椅子で130人ほどである。2023年10月15日、その日は雨も降り、気温も上がらない寒い日であったが、夕鶴の里資料館のイベントで行われた「第22回夕鶴の里 民話まつり ～後世に伝えよう民話のころ～」には大勢の人が訪れて、語り部ホールのパイプ椅子が全て使われるほどの盛況であった。

私が初めて夕鶴の里を訪れて語り部の語りを聴いた際、「鶴女房」が一番目に語られ、その語りが始まる前に「鶴女房」は「伝説民話⁴⁾」であると説明された。先に述べた「民話まつり」でも「鶴女房」は「伝説民話」であると説明されていた。「鶴女房」に続いて、同じ珍藏寺にまつわる話である「大銀杏と与兵エドの」、普通の民話であるという「犬の足」、そして地域の湖にまつわる話である「白竜湖の琴の音」を聴いたが、これらのうち、「大銀杏と与兵エドの」、「白竜湖の琴の音」の2つも伝説民話であると説明された。

夕鶴の里で語られる「鶴女房」を含めた伝説民話は、内容をできるだけ変えないように、資料を元に語られている⁵⁾。その文字資料とは、地域の民話をテープレコーダーで集めた武田正氏⁶⁾が、文字に起こした資料である。しかし、語り部の方が民話の語りを練習する際には、文字資料を読むことよりも、先輩の語り部の語りを耳で聞くことが中心になるようだ。



図3 語り部ホール（著者撮影）

おわりに

以上のように、夕鶴の里までの道中、夕鶴の里資料館、夕鶴の里語り部の館、の3部にわけて、「鶴女房」が語られている様子をまとめた。「鶴女房」以外にも、「大銀杏と与兵エドの」等複数の昔話が存在するが、本稿では「鶴女房」に的を絞りまとめた。実際に、夕鶴の里までの道中にも「鶴女房」が語られていることからわかるように、南陽市で最も多く語られているのは「鶴女房」であると考えられる。赤湯駅での「鶴女房」からは地域の観光資源の一つであるという側面が見受けられ、おりはた駅の「鶴女房」からは地域に密着している側面がわかる。資料館では「鶴女房」が珍藏寺との繋がりだけでなく、地域の産業と結びつけられるという、他の場面とは異なる文脈でも語られていることが特徴である。また、本稿では取り上げなかった別の場面、例えば地域の図書館などでは、また異なる語られ方がなされているかもしれない。今後は、様々に語られる「鶴女房」の様子を見ることで、南陽市における「鶴女房」の位置づけを明らかにしていきたい。

註

- 1) この内容は、夕鶴の里で語り部の方から聞いた物語を、メモ書きを元にして、あらすじを書いたものである。
- 2) そのパネルでは、宮城県白石市と山形県南陽市を結ぶ街道を民話・童話の側面から紹介しており、その中で夕鶴の里資料館も紹介されている。
- 3) 語り部、囲炉裏、聴き手という順に座ることになるため、聴き手は、囲炉裏端で昔話の語りを聞いている気分になれるのだと考えた。それを語り部の方に尋ねてみたところ、そのような面もあると思うが、何よりも昔話の中に囲炉裏は登場している、という答えが返ってきた。「鶴女房」では、金蔵の家にやってきた娘が囲炉裏で温まるし、「犬の足」という話では、囲炉裏の五徳から犬は足を一本もらうのである。
- 4) 語り部の方は、「伝説民話」を、実際に地域に残っているものについて語っている昔話のことだと説明した。
- 5) これに対して伝説民話ではない「普通の民話」は、場合によっては変えても良いそうだが、例えば、昔話を語ることを目指す大学生が、方言のイントネーション等がわからずに話すことができない場合である。
- 6) 武田正氏は、夕鶴の里の専門研究員であった人である。南陽市を含んだ置賜地方を中心に、地域の昔話を集めており、彼の著作は南陽市図書館にも多く蔵書されている。

引用文献

関敬吾

1978 『日本昔話大成 第2巻』。東京：角川書店。